

# 学校から仕事への移行期にある大学生の発達に関する質的研究 ～生活する自己と生活をつくる自己に着目して～

東京学芸大学大学院教育学研究科養護教育専攻 沖津奈緒  
指導教員 朝倉隆司

## 1. はじめに

近年、若者が健康的に思春期から成人へ移行を成し遂げる重要性が指摘されている。そこで、従来の疾病パラダイムを超えて、生活や人生の歩み方に着目した社会学的な視点が必要である。本研究の目的は、学校から仕事への移行期にある大学生の生活体験と、それと同時に経験される心理社会的な変化について質的研究法により分析し、大学生がどのように自分たちの発達課題を達成していくのか、そのプロセスを明らかにすることである。

## 2. 方法

2014年11月～2015年2月に都内国立大学T大学の4年生20名（男女20名）を対象として半構造化インタビュー調査を実施した。用いた分析方法は、M-GTAである。分析焦点者は「今年卒業し、来年から就職あるいは進学の見込みのある大学4年生の学生」、分析テーマは「大学生が自らの生活や人生の発達課題を達成していく体験プロセス」とした。

## 3. 結果

分析の結果、9つのカテゴリーと11のサブカテゴリー、66の概念が生成された。「大学生が大学生活の中で自らの生活や人生の発達課題を達成するプロセス」は、大学生が“自由な身分の自覚”の上で《大学生生活に順応する》ことを起点とし、生活する自己の体験と生活をつくる自己の成長が生じていた。生活する自己の体験は、《生活の自己調整プロセス》《職業開拓プロセス》《他者関係の安定化プロセス》《大人同士の家族関係の得変容》の4つの領域があった。そして、それぞれの領域は、生活をつくる自己の成長を媒介して相互に影響していた。生活をつくる自己は、《自己の問い直しプロセス》《時間の見通しの変容プロセス》《社会人化志向の強まり》であり、それらは相互に関係し合いながら発展していた。なお、【大学の履修システム】や【家庭の経済状況】、【周囲からの社会人らしさの要求】などの《大学生が抱える事情》が、生活をつくる自己の成長と生活する自己の体験を左右する要因になっていた。

## 4. まとめ

本研究により、学校から仕事への移行期にある大学生が大学生活の体験において、生活や人生の発達課題を達成していくプロセスを明らかにすることができた。そのプロセスとは、大学生が生活する自己の体験を繰り返す中で生活をつくる自己が成長し、なおかつ、生活をつくる自己が生活する自己をコントロールするようになるという、自己再帰性が成長するプロセスと言える。また、大学生の発達課題は、再帰的に生活や生き方を問い直し、自らの選択や行為をマネジメントできるようになることと、具体的で長期的な見通しを持ち社会人になる自己をつくろうとすることであった。したがって、これらの発達課題を乗り越えようとする姿こそ、大学生の健康的な姿であると考えられる。

**Key Words** : 学校から仕事への移行, 質的研究, 生活する自己, 生活をつくる自己, 大学生の発達